

孔捷生と天安門事件

杉山 幸子

(1)

孔捷生は1952年11月、広州生まれ。1978年度の『姐妹』、1979年度の『因为有了她』と続けて全国優秀短篇小説賞を獲った。更に『普通女工』で1982年度の全国優秀中篇小説賞も受賞。作家としての力量はともかく、解放後生まれの若手作家の中では、比較的知られている作家といえよう。

その孔捷生に『劫後銀花帯血闘』(『作品』1979・1)という散文がある。1976年4月、孔捷生は広州にありながら期せずして天安門事件と関わりをもつことになったらしい。その経緯が、まだ青い熱情のこもった文体でつづられているので紹介したい。

(2)

『姐妹』は処女作だが、創作を志したのは1972年のことだという。しかし、当時の虚偽の文学に嫌気がさし、四人組粉砕後になって再び筆をとったと『我为什么我要写《姐妹》』(『工人日报』1979・4・3)で

發表短篇小説創作談(文化芸術出版社所収)の中で書いている。孔捷生の経歴については、1968年に初級中学卒業後、広東省高要県、次いで海南島五指山区の農場に“植隊”されていたこと、1974年に広州の国営展華鑛工場に配転されたこと、1980年初め(1979年説もあり)中国作家協会広州分会所属の専業作家となり、春から秋にかけて北京の第5期文学講習所に招かれたことを除いて、出身その他は今のところ不詳。しかし、もともと文学青年だったのだろう、1976年1月、周恩來の死を知って悲憤の余り、10首の詩詞を作ったという。中国が一層激しい動揺にさらされると感じとったからである。これらの詩詞のうち、この散文に4首が挙げられている。

今私の手許には、天安門事件の詩抄が4種ある。刊行順に記すと、香港文化出版社『天安門革命詩抄』及び第二集、人民文学出版社『天安門詩抄』、北京出版社『天安門詩文集』及び続編、中国青年出版社『革命詩抄』である。1976年の清明節前後、天安門広場の人民英雄記念碑の周囲には、10

万人もの群衆が自発的に集ったという。それらの無名の人々によって、敬之さ水ない程の花環と共に、詩詞や“挽聯”が飾じられた。その詩詞や演説などは人々によって筆記され、彈庄ののちも語り継がれ、身写本としても流伝した。作者もわからず無題のものが多い。これらの詩詞は、編者によってまちまちの体裁に編まれているが、実質的には重複も多いと思われる。孔捷生の挙げていた4首の詩詞も、4首の詩文集のいずれにも収められている。もっとも、これらが孔捷生の作品と断定はしきれない。しかし、『新夜銀花帶血開』の内容から推して、ほぼまちがいはなかろう。先づ、その4首を紹介しておこう（孔捷生は先の散文中、詩詞については簡作字を用いていない）。

沁園春

恩来同志領導南昌起義、何
反動派打響第一槍

蕭牆烽驚，山河色變，虎
狼猖獗。正波瀾驟歇，風
雲幻滅；鼠輩降屈，党人
肢裂；泪洒江流，紅塗甲
冑。問蒼天从此崩歇？雷

電噴，道野火春風，英雄
未絕！

政推出自槍杆，听南昌城
炮声初，令金戈光寒，
檢閱重越；玉宇霞飛，晨
光初泄。令敵人間，軍旗
搖撼，紅纓化滅当年血。
千秋史，記雄師始建，功
昭勳烈！

揚州樓

恩来同志在重慶中央辦事處
与蔣斗争

前方吃緊，後方緊吃，誰
夢中原寇兵？
梨園管弦急，論區齊血腥！
自君臨危誓力赴，舌劍唇
槍，威冠霖城。舉之專，
凜然大義，滿座皆驚。
瀟門虎胆。嘉陵夜夜作潮
聲，依憑國汪蔣，救亡義
士，抗日榮英。曾家紅岩
翠柏，万夫賦，一往深情。
鉄臂挽山河，丹心永照汗
青！

翠巖九天疑白絮，
盆傾一泪湿縑紗，
病危呔心帶社稷，
冬隆盡血戮梅花，
死義泰山心似鐵，
生涯革命党為家，
斗与腥雪紛未已，

英雄何日返中原。

名赫日月光輝里，
功標竹帛翰墨間。
十回潮狂肝胆赤，
万爭親解髮毛斑。
遺灰已化千時綠，
壯志猶存一片丹。
泉台尚有妖魂在，
再振長纓滅党奸。

なお、孔捷生の書いた10首のうち、残り9首の詩詞も詩文集の類に収録されている形跡があるが今は認定できない。

(3)

ところで、孔捷生は当時広州にいたのである。では、どうして天安門広場に彼の詩詞が張り出されたのであろうか。孔捷生は10首の詩詞が波瀾を引き起こすことになろうとは夢にも考えずに、たこさんの人々に見せたという。そして二月下旬、北京の友人(女性)が広州を訪れた。政局について孔捷生と談じ合い、意気投合した彼女は、彼の詩詞をメモしていった。そして彼女は別の女性労働者(当時孔捷生とはまだ面識がなかった)と二人で、詩詞を書きつけた紙

片を、広場のあちこちに張ったのである。

(4)

更に、彼女達は鉄色のネルの布を買い、社を徴して花環を仕上げ、人民英雄記念碑の前に献じたという。上方には周總理の画像、下方には羊頭形に飾られた白い花。両側には「無私才偉大、英名垂千古」と記した“挽联”。そして中央の白絹には「崇敬れ天凝白絮」で始まる七言詩が書かれた。この文字は魯迅芸術学院出身の老同志に書いてもらったという。この花環は『革命詩抄』に収められた写真の中に見ることができ、とも孔捷生は書いている。もっとも、女神の詩文集に収録された写真から、それらの文字を見出すことは難しい。なお、彼女の書いた“挽联”も『天安門詩文集』続編に収められている。

(5)

また彼女達は、広場に張られた詩詞や花環などの写真を撮った。他にも写真を撮った人々は何人もあつたらしい。撮影者の名前入りで詩文集に

収められていたものもある。それらの一つに「亂世嬰棋」とある（北京出版『天安門詩文集』続編）。吾道——海嬰の同代名が全くの同姓同名異人なのか、興味をそそられるが連断はできない。しかし、今日見ることのできる写真は、いくらもないらしい。というのも、写真屋に現像に出したものの、反革命として追求されるのを怖れて受けとりに行けなかった例も多いと伝えられる。

しかし、四五事件への「弾圧」の続く頃、孔捷生のところに下着一本と詩文集（時期から推して手写本と思われる）の小包が届いた。友人である彼女が人を介して保存し譲り渡されたのである。彼女は秘かに現像のやり方を学んでいたのだ。

（6）

彼女は更に次のようなニュースも伝えてきた。北京市公安局が多くの詩文のうち12篇を「反動詩詞」と見なし、大衆を動員して12人の「反革命」を捕えようとしているという。これは孔捷生もすまに目にしていた。ところが、なんと12

篇の中には孔捷生が作り、人たちが張った詩も含まれていたのである。（もっとも公安文書の筆蹟に挙げられた「撫眉劍出鞘」で終わる五言詩以外、孔自身のものも含めて残りの11首がいったいどのような詩であつたかは彼も記していない）

こうして、彼等三人は一髪千鈞を引く運命となつたのである。まもなく広州にも捜査の手が伸びてきた。そこで彼は、詩詞と下着を隠し、平藪に事態の推移を見守つた。

（7）

ところが待たずに到来したのは、1976年10月の「偉大なる尊愛」だつたのである。その時、孔捷生は所用で北京へ来ていた。そして10月8日の晩は、彼の詩をメモしていった例の友人の家に居たという。夕時をまわった頃、彼女の友人がやってきました。その男は「見知らぬ者が坐っているのを見て、口を開けなかったが、教令もたためうちに我慢できなくなつて彼女を厨房に連れ去つてゆき、鍵をかけた。あの頃彼女はあつた種の事柄について非常に敏感になつていた。ま

は、何か重大な事件が起こったと予感した。果たして、あの友人は顔が紅潮させて出てくると、私に目うちした。『6日の晩、例の女人が捕、たのよ！』「ヒソヒソ話が夜風に飛翔し、眠れぬ北京を沸かした。翌日、商店の酒はすべて売り切れとなった。」

(8)

天安門事件は勿論逮捕者を出していた。例の女性労働者の工場からも二人捕、た。有名な青年英雄季西林と季洪潮だという。純いて『11人の反革命小集団』にも累が及んだ。彼等は、孔捷生の友人達と行動を共にしていたわけではない。しかし、あの数日間は何回となく顔を合わせていた。だから彼等が捕まると、あの女性労働者も入獄必至との覚悟をさめた。

しかし、彼らは天安門広場で出会った人々の名を語らねた。日人組逮捕後の或る秋の日、孔捷生等五人は北京西郊の香山に登った。その日女性労働者は、緑色の服を着ていた。彼女は興奮して言った。「清明節の頃着てたのは、この服だ、たのよ。それ以来

半月間箱の底にしまいこんでいたけど、今日はこの服を着ても、もう怖くないわ。」

(9)

その女性労働者は、数年前のもの『天安門事件目撃記』を著いた、とも孔捷生に語った。もしもと文章を書くのは好きではなかったのに、この時ばかりは、生まれて初めて書きたいという衝動が起こったのだという。しかし、この原稿は天津の友人に送ってもらっていたが、事態が緊迫した時、廃棄されてしま、たともいう。

そこで、孔捷生の方も興奮気味に、代わりに書いてあげるよ、という話にな、たらしい。

(10)

実は、先に挙げた女首の話は、各種詩文集に載せられているものとどこどころ字句が違っている。彼の書いた話話であることを知る者は、出版機関に手紙を出して訂正するよう勧め、てくれるという。しかし、孔捷生は書いている。「私は謝絶した。それらは私のものではない。もし二人の若い友人が勇敢に斗争のと首

として用いていなかったなら、それらは鋭さを失くしたことになるだろう。また、それらはあの二人の戦友のものでもない。これら詩句は、革命群衆の手を経て集団創作されたのである。「何組かの清明詩抄（手写本を指す）中の詩は、大部分がすでに『革命詩抄』集の中に収められている。しかし、そのことは少しも手写本の意義を減退させることはないのだ」と。

（すぎやま なこ）

柳青とリンゴ
— 柳青再評価をめぐって
加藤三由紀

柳青にく建議改革陝北的土地経営方針」という文書がある。あらましを紹介しよう。

10年のうち9年は旱魃。耕地は段段畑式で細分されている、という陝北地区は、毛沢東の語る「水利は農業の命脈である」。農業の出路は機械化にある」という二つの根本的条件からすれば、完全に失格である。では、どうすればよいのか？ 陝北地区の気候・土壌・地形は、理想的なリンゴの産地なのである。冬季は-20℃の厳寒にみまわれ害虫

の心配が少ないから果樹代を節約できる、この点は現生産地の陝東遼東遼西にも優っている。しかも国土保全に役立つ。傾斜地にリンゴ、風の強い山の背に桑、平地には穀物を育てる。地方都市に製紙（桑の柘枝を利用してリンゴのパッケージにする）リンゴ酒醸成・かんうめ・紡織等の工業を興す。エネルギー源には黄河を利用した水力発電を活用、更に地下資源も開発できる。成否のカギは鉄道運輸である。これは陝北の土地経営の進展に沿って計画的に整備していく。そうすれば不足分の穀物（^①は自給できる）を陝北市場に入荷しやすくなるし、園芸作物・生糸製品を燕（天津）へ最短距離で運搬することができる。穀物を要にする」とは言っても、一地区のみで自給自足を圖らねばならないというのではない。新運制における停滞を終結させ小土地所有制を消滅させた以上、社会主義的計画経済のもとに、各地の地理的条件を活用できるのである。

この建議文は1955年、中共陝西省委第一書記に提出されたが、一読もされずに省委農